

鉄則

宇検村立久志中学校 二年 市川 藤乃

オレは目を走らせた。右、人影なし。左、人影なし。正面、なし。もちろん、学校のどの教室にも明かりはない。あたりは静まりかえっている。オレは軽く足首をまわして、一気に走りだした。グリーンキャンパスをとび降り、花だんに着地する。石を落とさず、花を折らず。石を落としたら、今夜忍びこんだことがばれてしまう。証拠を残さない。これは鉄則だ。お前もそれは覚えておけ。

前を見ると、花だんの前に糸をはっているのがわかった。ははん。オレみたいに忍びこんでくるイノシシを足どめするってんだな。たしかに、ひっかかったら痛そうだ……。言い忘れてたな。オレはイノシシだ。今は細かく自己紹介する時間はないから、これだけ言っておく。オレは強い。人間のわなにもかからない。だから、目の前の糸もお茶の子さいさい。少し後ずさって助走をつけて、糸の手前で思い切りジャンプだ。ほら。楽に切り抜けた。これを普通のイノシシはできないんだ。まず糸があるのがわからないから、ひっかって足を痛めてしまう。この前なんか、転んで顔を打ったやつを見た。やれやれ。みんな弱っちいのばっ

かりだ。

今日はどこがいいか……。あ、あのブランコとかいう物体の前がよさそうだ。オレは掘って、掘って、やっとごちそうを見つけた。なにかって。ミミズだ。おいしい、気持ち悪いなんて言うなよ。うまいんだぜ。一度食ってみればいい。おおっ、ここにもいた。

オレは満腹になったから、掘った穴をうめた。こうしとかないとばれる。さっきも言ったろ。証拠は残すな。よし、これでいい。うめたら、さっさと帰る。ムダに長居しないほうがいい。今夜は月がきれいだ。だが、見ていてはいけない。さっさと帰れ。これも鉄則だからな。オレは鉄則どおりに、暗く静まりかえった学校を後にした。

ある夜、オレはまた学校に忍びこんだ。糸もとびこえ、いつもみたいに掘って、ミミズを探した。だけど、今日はなかなか見つからない。だんだん、いらいらし始めた。ついカツとなって、近くの木を思いきり切った。その時……。ドサッ。

「痛たたた……。あなた、結構力が強いんですね。小さめの木とはいえ……。」

正直びっくりした。ハブが落ちてきたら、お前だつてびっくりするだろ。そして、ハブから離れて身がまえるはずだ。え、逃げる。まあ、人間はそうするのか。

少なくとも、オレは身がまえる。

「身がまえなくてもいいですよ。イテッ。心配しなくてもかんだりしませんから。」

「・・・本当に。」

「はい。人間に見つからないように、こそこそしてるくらいの僕ですよ。イノシシをかんだりしません。」

「そうか。それより、お前、なんで見つからないようにしてるんだ。」

「もちろん、つかまらないように、という意味もありますがね。人に会ってびっくりしたはずみにかんだり・・・、とかいった事件がハブの仲間であつたんです。それで・・・。」

「ふうん。まあ、人間はハブに比べりゃ弱いからな。本当に笑いができそうだぜ・・・。」

「えっ、まさかあなた、人間・・・っていうか、自分より弱い者をばかにしてるんですか。」

「悪いか。オレは強い。弱いやつは知らねえ。強いやつが弱いやつを助けてやるなんて、そんなバカなことがあるか。」

「・・・だから、毎晩一人で来ていたんですね。あなたの住んでいる山、最近、食料不足らしいですね。ここまでたどり着けるのは、あなただけみたいじゃないですか。仲間のみなさんに、食べ物を持ってあげたら

どうですか。」

「さっきも言ったろ。そんなに、バカみたいなことするか。弱いやつが、強くなればいいだけだろうが。」

「そんなこと言ったって・・・。あれ、なんか向こうがさがしくないですか。」

オレは、少しこのハブにいらしていたが、落ちて着いてそっちを見てみた。こんな時間に、多くの人間がいる。

「わああつ。僕の友達が。見て下さいよ。あの人、名人です。その名人に友達がつかまった。逃げましょう。」

オレは名人を知らなかったが、ハブがあわてているので一緒に猛ダッシュで逃げた。掘った穴をうめず、そのままです。

「名人、またつかまえましたね。」

「ハブはどうでもいいんじゃない。君、見たかね。学校の校庭の穴。」

「例の、強者のイノシシじゃないか、ですよ。今まで、どんなわなにもかからなかったやつ・・・。」

「そうじゃ。そうに違いない。どこで見つけたか、サングラスをかけておるとか。面白いやつじゃ。」

「なにか、策はあるんですか。」

「わしは、一度やつと対決してみたかったのじゃ。策はある。やつがかかるとは思えんがのう。」

急いで逃げた数日後、オレが学校に行くときミミズがてんこもりになっていた。ハブがやったのか。あいつはいいやつだって、最近わかった。きっとハブだな。オレはがつついて食べていた。後ろから名人が近づいてくるなんて、全く思っていなかった。

突然、ハブがオレにタックルしてきた。あいつも力あるじゃねえか・・・とか思っているひまはない。オレはやつと名人に気づいて、逃げた。ハブはオレの代わりに捕まった。自分以外、弱いやつのことなんか考えたこともなかった、最低なオレの。名人はオレねらだったはずだけど、ハブで満足したみたいだ。他の人間と帰っていった。オレは、しばらくその場に立ちつくしていた。

オレは目を走らせた。右、左、正面。人影はない。花だんにとび降り、糸をとびこえる。今日はすべり台とかいう物体のそばで穴をほった。いたいた、ミミズ。早速、持ってきた袋に入れた。人間はこうして運ぶんだろ。

なんでこんなことしてるかって。別に。前、ハブに言われたからじゃない。ただ、あいつに負けたくな

ったただだ。オレはその気になれば、ハブに勝てる。ハブより強いんだぜ。でも、強いけど最低なオレを、ハブは助けてくれた。弱いやつに、何にだって負けたくない。優しさの量だって、負けてたまるか。

袋はいっぱいになった。山のみんなが満足できるように。おっと、帰る前に穴をうめていくこと。鉄則だ。それと、最後に。お前が強かろうが弱かろうが、どんなやつにも優しさでまけちゃいけねえ。これも鉄則だ。

覚えとけ。

